

1 研究課題

「豊かな心で、共に生きる子どもを育む道德教育」
～人と人とのかかわりの中で、よりよく生きる子どもの育成～

2 課題設定の理由

新学習指導要領では「生きる力」を育むため、道德教育の一層の充実を図ることとされている。道德は、子どもが道德的価値とのかかわりにおいて、今までの生き方を振り返り、自己を見つめる時間である。そして、道德的価値の自覚と共に、自己の生き方についての考えを深めていくことが大切である。そのためには、自己の経験や知識につなげ、友だちの考えと比較し、他の道德的価値との関連を図ることが重要なこととなる。

学校は、子どもが集団の中でかけがえのない一人の存在として大切にされ、自己実現の喜びを味わうことができる場所であってはならない。子どもたちの望ましい人間関係や教師との信頼関係の中で、自分の大切さと共に他の人の大切さを認め合い、よりよく生きる子どもを育んでいきたい。

①学校教育目標から

本校の学校教育目標は「本気で学び、元気に遊び、正しく生きる上小の子の育成」であり、これは知・徳・体の調和のとれた人格の形成を目指したものである。本校の道德教育は生命尊重を基盤に、場に応じた適切な判断力、自立的に行動できる道德的実践力と基本的生活習慣の育成を心がけてきた。特に、道德教育の要となる道德の時間は、各教科や特別活動、総合的な学習の時間等での学びを、補充、深化、統合し、道德的実践力を育んでいきたい。

②今日的課題から

今日の社会は、少子高齢化・国際化・高度情報化等に伴って急激に変化している。

本校の子どもたちを取りまく環境も、住宅地の造成等により地域とのかかわりが少ない家庭が増えるにつれ、さらに核家族化が進み、人と人とのつながりが薄れてきているように感じられる。家庭での教育が必ずしも十分に機能しているとはいえない家庭もみられる。また、子どもたちの遊びも異年齢での戸外で群れて遊ぶ形態から、ゲームでつながった個人中心の遊びに変化してきている。そのような中で、子どもたちの生活習慣やマナー、善悪の判断等が目だって低下してきている。子どもが人と人とのかかわりの中で、共によりよく生きるため、自分自身を振り返り、自分を見つめることのできる道德の時間は非常に重要であると考ええる。

③子どもの実態から

研究推進委員会では、「本校児童はのびのびとして明るい、規律正しい節度ある行動がとれないことがある」「教師の指示や働きかけには積極的に取り組み、勤労意欲はあるが、自主性・主体性や根気強さに欠ける傾向がある」「親しい友

達に対しては親切で思いやりを持つが、その一方で相手が嫌がることを考えずに言ってしまうなど、思慮深い行動に欠ける面がある」等の意見が出された。平成20年度全国学力・学習状況調査結果からも、「自尊感情」「規範意識」に関する質問に対する回答が栃木県の平均を下回っており、同様の課題が見られた。

平成21年5月8日には「教研式HUMAN道徳性検査」を使用し、2年1組39名、4年1組38名、6年1組35名の児童を対象に、道徳性実態調査を実施した。

低学年（2年）児童の道徳性発達水準は、ほぼ全国水準であり、各項目ごとの比較では、（4）「主として集団や社会とのかかわりに関すること」の〈家庭愛〉〈郷土愛〉で、全国水準を下回っていた。中学年（4年）及び高学年（6年）児童の道徳性発達水準は、全体的に全国水準を上回っていた。各項目ごとの比較では、中学年では〈思慮〉〈勇気〉〈明朗誠実〉〈友情〉〈感謝〉〈自然動植物愛護〉〈生命尊重〉〈敬けん〉〈公德心規則尊重〉〈勤労〉〈愛校心〉〈愛国心〉の項目で全国を上回っていた。また高学年では〈思慮・節度〉〈勇気・努力〉〈自由規律〉〈礼儀〉〈親切〉〈友情〉〈自然動植物愛護〉〈生命尊重〉〈敬けん〉〈役割自覚・責任〉〈公德心規則尊重〉〈権利義務〉〈公正公平〉〈勤労・奉仕〉〈家庭愛〉〈愛校心〉〈郷土愛・愛国心〉の項目で全国水準を上回っていた。

以上のことから、これまで本校で実践してきた人権教育を足がかりにしながら、道徳的価値の自覚を深め、人と人とのかかわりの中で、共にによりよく生きる子どもを育てていきたいと考え、本研究課題を設定した。

3 研究の仮説

道徳の授業を充実させ、道徳的実践力の育成をはかり、家庭・地域との連携による道徳教育の推進に取り組むことで、人と人とのかかわりの中で、共にによりよく生きる子どもを育むことができるだろう。

4 研究内容として

①道徳の授業を充実させるために

ア 道徳教育の指導計画について

- ・道徳教育の年間指導計画を作成する
- ・総合単元的な道徳の単元構想を充実する
- ・人権教育との関連を図る
- ・心のノートの活用を図る

イ 道徳的価値を深めるために

- ・子どもの実態に即した道徳の授業を実践する
- ・共感的に理解し内面を見つめるための、役割演技等の表現活動を工夫する
- ・資料に深く入り込むための指導過程を工夫する
- ・ゲストティーチャーを招いた効果的な授業を工夫する

- ウ 実態に即した指導について
- ・子どもの道徳性実態調査を実施する

②道徳的实践力を育成するために

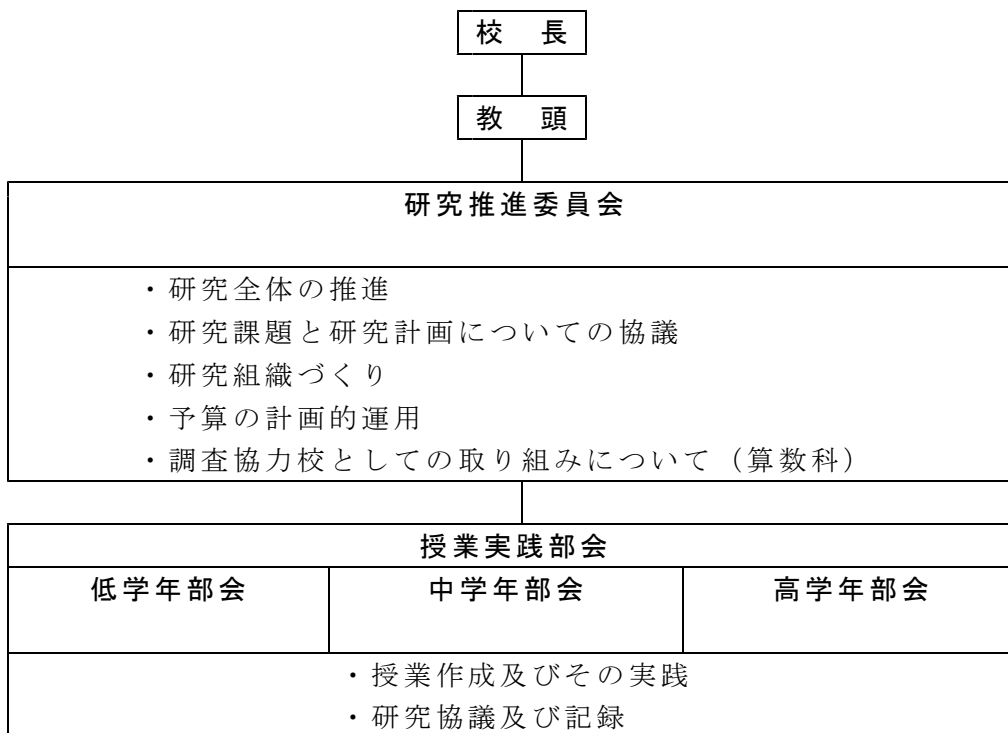
- ア 人権教育が機能した学級経営に努める
- イ 縦割り班による異学年交流や地域の方々との交流を積極的に取り入れる
- ウ 学校行事や児童会活動等の活動のめあてと道徳の主題との関連を図る

③家庭・地域との連携による道徳教育を推進するために

- ア 授業参観日に保護者に道徳の授業を公開し、本校の道徳教育についての理解を求める
- イ 道徳的实践の場として、家庭での勤労体験を位置づけ、保護者とともに子どもの成長を支援していく

5 研究組織

授業実践部会は、低、中、高学年部会の3つの部会で構成し、T・T教員や専科教員を含め、各学年ごとにそれぞれの部会に所属する。



6 道徳の実践

(1) 第1学年 うそつき 「おおかみがきた」(イソップ童話)

①『道徳的価値を深めるために』を受けて

ア 言葉を生かし(言語活動を重視し)、考えを深める工夫を行った。役割演技を取り入れ、村人や羊飼いのその時の表情や気持ちを、はっきりさせた。

イ 内容の理解を助けるために、場面絵や村人や羊飼いの表情の分かる絵を黒板に掲示し、気持ちをまとめていった。

ウ 児童が自らの成長を実感できるように、最後に、羊飼いの気持ちをプリントに書かせ、一人ひとりが「うそ」をつく、「信用」を失うということの意味を理解できるようにさせた。



(2) 第2学年 友だちっていいな 「モムンとヘーテ」(光文書院)

①『道徳教育の指導計画について』を受けて

ア 授業後、心のノートの「ともだちパワーをあつめよう」を使い、友達からもらった励ましの言葉や嬉しかった言葉、友達と協力して取り組んだことなどを記録させた。

②『道徳的価値を深めるために』を受けて

ア 資料を紙芝居にして場面の様子が分かるように提示し、紙芝居を場面絵として利用していくことで、児童が理解しやすいようにした。

イ 資料を三つに区切って提示することにより、児童が資料に集中できるようにすると共に、登場人物の心情をとらえやすくした。

ウ 役割演技を取り入れることにより、登場人物の心情をとらえやすくしたり、共感的に理解したりできるようにし、内面を見つめられるようにした。

エ ネームカードを使って評価することにより、児童の思いをとらえられるようにした。

(3) 第2学年 生きものにやさしくするところ

「うさぎと友だちになろう」(栃木県獣医師会)

①『道徳教育の指導計画について』を受けて

ア 授業後、心のノートの「みんなみんな生きているよ」を使い、自分が生まれたときのことについて家の人にインタビューしたことを記録させ、自分は周りの人から愛情をもって育ててもらっていることを気づかせた。

②『道徳的価値を深めるために』を受けて

ア うさぎ当番の体験から感じたことについて話し合わせ、子どもの実態に即した道徳の授業を工夫した。

イ 共感的に理解し内面を見つけるために、うさぎとふれあう体験活動を取り入れた。

ウ 映像資料を使い、児童が集中できるようにした。



(4) 第3学年 自分の考えで行動 「バドミントンクラブ」(文溪堂)

①『道徳教育の指導計画について』を受けて

ア クラブ活動見学を1週間後に控え、実際に起こりうると考えられる資料を使用することにより、
実際生活に即し、最終的な決定には何が大切なのか
考えさせた。

②『道徳的価値を深めるために』を受けて

ア 資料の読み聞かせを通して児童への語りを大切に
にし、資料に深く入り込むための指導過程を工夫
した。

イ 読み聞かせをしながら人物絵や場面絵を掲示し、内容の理解を助けた。

ウ 役割演技を行うことにより児童の考えや思いを広めると共に表現活動を工夫した。

エ 「クラブ選択に当たって」という4年生からのアドバイスを読むことにより、
上級生のクラブ決定にあたっての気持ちを知った。



(5) 第4学年 人の気持ちを考えよう

「なくしたかぎ」(矢野幸彦 道徳性発達研究会)

①『道徳教育の指導計画について』を受けて

人権教育の指導方法等の在り方について[第三次とりまとめ]指導等の在り方編では、「人権教育の理念である『自分の大切さと共に他の人の大切さを認めること』ができるようになるためには、次のような力や技能などを総合的にバランスよく培うことが求められている。

ア 他の人の立場に立ってその人に必要なことやその人の考えや気持ちなどがわかるような想像力、共感的に理解する力

イ 考えや気持ちを適切かつ豊かに表現し、また、的確に理解することができるような、伝え合い、わかり合うためのコミュニケーションの能力やそのための技能

ウ 自分の要求を一方的に主張するのではなく建設的な手法により他の人との人間関係を調整する能力及び自他の要求を共に満たせる解決方法を見いだしてそれを実現させる能力やそのための技能

以上のことをふまえて、本時のモラルジレンマ的な授業を検討していくと、特にアとウの項目が当てはまることがわかる。つまり、単なる正しさだけを求めるのではなく、常に他者の存在を意識し認めながら解決方法を模索し、尚かつ、自他共に益のある方法を思考する過程を通して人権尊重の精神を涵養することができるからである。

従って、このような授業スタイルを何度か経験することで、児童の中に一方だけでなく、常に他者の存在を意識しながら考え、行動する習慣を身につけることができると考えた。

②『道徳的価値を深めるために』をうけて

ア 複数の価値項目に基づいて考えなければならない資料を提示した。

イ 児童によく考える機会を与えた。

ウ 認知不調和な状況を常に意識して考えさせた。

エ 話し合い討論を有効に機能させる発問を心がけた。

オ 自分だったらどうするかは問わないようにした。

なお話し合い活動では、以下の点も留意した。

カ 過去に振り返って解決策を求めないようにした。

キ 物理的な解決方法を探り上げないようにした。

ク 第三の解決方法（ジレンマ砕きによる）より概念砕きを考えさせた。

さらに、オープンエンドの良さを生かすために次のような活動を取り入れた。

ケ 家に帰って保護者の意見を聞いてから、もう一度考えさせた。

（６）第４学年 思いやる心を伝えよう 「心の信号機」（学研）

①『道徳教育の指導計画について』を受けて

ア 事前に関連を図ったアイマスク体験活動を行い、相手の立場や気持ちに少しでも近づき指導の充実を図った。



②『道徳的価値を深めるために』を受けて

ア 道徳的実践力を育成するために、町内の視覚障がいがある方をゲストティーチャーとして招き、展開後半にねらいに合った話をしていただいた。

イ 言葉を生かし（言語活動を重視し）、考えを深める工夫を行った。友達の考えを聞く、自分の考えを伝える、話し合う、書く活動を取り入れた。

ウ 児童が自ら成長を実感できるようにする工夫を行った。ゲストティーチャーに、「これから自分はどのようにしていきたいか」というメッセージを伝えることで、自分の決意を実感させた。

エ 内容の理解を助けるために、場面絵を黒板中央に掲示して、人物が動くように設定するなど、教材の開発や活用を図った。

（７）第５学年 思いやりのこころ 「父の言葉－黒柳徹子」（文溪堂）

①『道徳教育の指導計画について』を受けて

ア 展開の３「価値の内面的自覚」のところで、心のノートP47の思いやりカードを用いて、「自分が伝えた思いやり」、「自分が受け取った思いやり」について記録させた。



②『道徳的価値を深めるために』を受けて

ア 資料に深く入り込むための指導過程を工夫した。事前に資料を読み、自分の考えをまとめさせておいた。

イ 子どもの実態に即した道徳の授業を実践した。自分の考えをはっきりさせ、話し合いに参加できるよう、「書く」活動を取り入れた。小集団による話し合い活動を取り入れた。



（８）第５学年 精いっぱい生きる 「命のアサガオ」（文溪堂）

①『道徳的価値を深めるために』をうけて

ア 資料に深く入り込むための指導過程を工夫した。

命の大切さを深めることができる資料の特色として、次の2点が考えられる。まずは、実際にあった話であること。そして、自分たちと同じくらいの年齢、もしくは自分たちより幼い子どもの話であることである。物語のような作り話では、ある程度フィクションを意識して読むであろうし、自分とあまりにかけ離れた大人の話では、「まだ先のこと」と思ってあまり深刻に受け止めない可能性がある。

そこで、資料の特色を生かすために、児童には資料を与えず、教師が資料に写真や場面絵、会話文等を交え、掲示しながらあらすじを語り、理解させ話し合わせた。

イ 子どもの実態に即した道德の授業を実践した。

自分の考えをはっきりさせ、話し合いに参加できるように、書く活動を取り入れ、それをもとに小集団による話し合い活動を行った。

②『家庭・地域との連携による道德教育を推進するために』をうけて

ア 授業実践において家庭との連携を図った。

自分がこの世に生を受けたとき、たくさんの愛と祝福をうけ、慈しみの中で育てられてきたことを伝えることは、生命があることへのありがたさを自覚することになる。そこで、保護者の協力を得て、児童宛の手紙を書いてもらい、自分の生活を振り返り、自分がかけがえのない存在だと知ることにより、家族の絆、命の大切さや尊さに気づかせるようにした。



(9) 第6学年 きまりを守るには 「きまりってどうして必要なの？」(学研)

①『道德的価値を深めるために』をうけて

ア 授業の中に話し合い活動を意図的に取り入れた。

話し合い活動を取り入れることで、児童は自分の気持ちを表現しながら、他の児童の話聞くことで、道德的価値の大切さを体験的に実感できるように工夫した。このことで相手への共感的理解や自尊感情を育て、豊かな心を持つ子どもの育成にせまりたいと考えた。

7 模範授業の実施

平成21年11月11日(水)には、資料作家の立石喜男先生をお招きして、模範授業及び講演会を実施した。本校職員からは、多数の質問も出され、充実した研修会となった。



【第6学年1組での模範授業】



【講演会での話し合いの様子】